

甲状腺外科草子 105

置かれた場所：山田方谷

杉野 圭三

備中松山藩の山田方谷は嘉永2年(1849年)藩主・板倉勝静から江戸へ召喚され、藩の財政を司る元締役とその補佐役である吟味役の兼務を命じられた。



備中松山城 (1999年8月) 山田方谷記念館 (高梁市)

当初、方谷は就任を固辞したが、主君の説得に就任を引き受けるに至った。方谷の元締役就任は藩士たちには驚きと反感で迎えられ、松山藩家中では次のような歌がはやった。

山だしが 何のお役に たつものか へ曰
(のたまわ) くのやうな元締

「山出し(田舎者)の山田氏(方谷)が元締になったところで何ができる」

御勝手に 孔子孟子を 引き入れて なほこのうへに 唐にするのか

「勝手に御勝手(財政)に儒者を登用し、財政をさらに悪化(唐=空)させるおつもりか」
感心するほどよくできた狂歌である。



嘉永3年(1850年)、板倉勝静は方谷に藩政改革の全権を委任し不平、誹謗中傷、背信行為を厳罰に処す旨を宣言した。

改革の開始にあたり方谷は、藩の財務状況調査報告書を提出、財政の危機的状況を明らかにし、債権者である江戸・大坂の両替商たちに返済延期を要請、財政再建と産業振興を図り、負債を返済する再建計画を提示し協力をとりつけた。

領内の産業では鉄山、銅山開発を藩直営事業とし、製鉄、鉄製品製造工場を建設、杉、竹、漆、茶の植林、葉煙草、檀紙、ゆべしの増産も奨励した。また、特産品の専売事業を担う役所を新設し、特産品を江戸へと直接回漕し江戸中屋敷内で管理した。

専売事業の利益は、開始から3年目の嘉永5年(1852年)には1万両を超え、翌年には5万両に迫り、負債償却が順調に行われた。

しかし、備中松山藩の藩札の信用は地に落ちており、方谷は嘉永3年(1850年)に藩札の発行を停止、市中に出回っている藩札を全て額面で買い取り、11,855両分の藩札を領民たちの目の前で全て焼却した。

更に、方谷は武士主体の軍制から農民を軍の主体とする兵制や屯田制を発案した。

この藩政改革は大きな反響があり、安政6年(1859年)には、越後長岡藩の河井継之助が弟子入りを志願、方谷は河井に**至誠惻怛**(そくだつ)という言葉を送った。



至誠惻怛：陽明学の祖、王陽明の言葉、「まごころ(至誠)と、いたみ悲しむ心(惻怛)があれば、やさしく(仁)なれる」

明治10年(1877年)6月26日、方谷は腎炎により死去、享年73歳。

方谷の才能と実行力は政治家・実務家として傑出しているが、それ以上に評価されるのはその才能を見出し、政策を実行できるように全権委任した板倉勝静の度量と判断力であろう。(1999年8月、備中松山城を訪れたが、猛暑の厳しい山城だった！夏には二度と行かん！)

参考資料：山田方谷(童門冬二)、山田方谷記念館(高梁市) Wikipedia

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2024年6月20日